



暁鐘の音

NO. 22

(かねのね)

秋田大学教職大学院 2021.11.28

育てる、生かすということ

教育実践専攻（教職大学院）

特別教授 小松睦子

先日も授業中の協議で、学級経営における「知る、理解する」「よさを生かす」ことの重要性や、表出しにくい子どもの思いやよさを見取ることの大切さを共有し合いました。

ふと私は、以前伺った宮大工の棟梁のお話を思い出しました。奈良県の法隆寺をはじめとする多くの寺院建築に携わりながら、弟子を育てておられる方です。厳しい徒弟制度を固守している宮大工の世界は一般社会とはかけ離れた感がありますが、人を育てる、生かすという意味を深く考えさせられた、こんなお話がありました。

○ 炊事や掃除をさせる中で、その人間の個性をつかむのです。

炊事の仕方からは複数の仕事を見通し効率よく進める<段取りのよさ>が、掃除の仕方からは<仕事の丁寧さ>が、仕事をやり遂げる姿からは<粘り強さ>が分かると言います。

○ じっと待ち、本当に苦悶しているときに初め

て一言だけ掛けてやるんです。

師匠の本物の仕事を見ている弟子たちは、夜、自分の時間に見よう見まねで必死に試行錯誤を繰り返すわけです。そして、思うようにいかずもがき苦しみ限界状態になったときに初めて掛けられたほんの短い一言が、深い霧を晴らす神の声になるようです。

○ その木の育ちを実際に見て、育った環境と同じように使います。

南向きで太陽を十分に浴びて育った木は、門や玄関用として育った向きの通りに立て、日影でじっくり育った丈夫な木は、建物の内部に使用します。それが木のよさを最大に引き出す方法だそうです。

特別な世界での教育ではありますが、学校教育や家庭での子育てにも通じるヒントが詰まっているように思い、折に触れて思い出す棟梁のお話です。

未来へのギフト

教職実践専攻（教職大学院）

准教授 櫻庭直美

深まりゆく秋の晴れた休日、私は「球根を植えよう」と思い立ち、行動に移しました。去年は思いつきで購入した球根の存在を忘れ、乾燥し可哀想な姿になったものと対面するという失敗をしまし

た。この反省を踏まえ、今年は花壇に植える場所を確保し、気に入った球根を早々に購入していたのです。そして、栽培に関する情報収集から始めました。すると、チューリップの場合、葉が出る方

向は球根の形と関係があることや、植えた直後からの根が伸びる時期に乾燥させると水を吸収する力が以後もなくなることなど、多くの情報を目にしました。また、園芸講師の方の「球根は『春へのギフト』』という言葉にも、心を揺さぶられました。情報収集を通して、球根の小さな外見からは見受けられないポテンシャルの大きさに、改めて感心させられました。集めた情報を参考に、一つ一つの花の向きや配置、ほかの花との取り合わせを考えつつ、丁寧に植えました。作業の後、休眠中の球根が気温や水等の刺激を適切に受けながら土中で目覚め成長していくことを想像し、春への期待感が一気に高まりました。

時短や効率がよしとされることの多い昨今、時間をかけて着実に育てていく感覚は忘れがちかも

しれません。学校で子供に関わる時は、どうでしょう。すぐに結果が現れてほしいという気持ちになるものですが、私は子供一人一人のポテンシャルは活発に成長していることを忘れず、それを引き出し高めるために各自に応じた刺激を、時間をかけて適切に与えていくことも大切にしたいと考えます。時間をかけることで、子供を見取る目に余裕が生まれ穏やかになりますし、小さくとも成果が見られたときには教師としてのやりがいを強く感じるものと思います。球根が「春へのギフト」ならば、教師の子供への関わりの数々は「未来へのギフト」と捉え、院生の皆さんにはインターンシップや新たに赴任する学校での子供との関わりを充実させてほしいと思います。

あきた惟蔭の会総会

学校マネジメントコース
現職院生1年次 佐藤茂樹

令和3年10月9日(土)に秋田大学教職大学院同窓会「あきた惟蔭の会(いぶきのかい)」総会が、昨年度に引き続きオンラインで行われました。「あきた惟蔭の会」は秋田大学教職大学院の発展に寄与することを目的とし、平成28年度に発足されました。これからの教職大学院の発展と、今後の秋田県の教育を牽引する教育者を育てるという責任と役割から、「物事をよく考える・思う」の意味で「惟」、そして秋田大学の学章に「秋田蔭」が使われていることを合わせて「惟蔭(いぶき)」となりました。また生命の活気ある様の意味である「息吹」とかけて、これからの教職大学院のますますの発展と活躍を祈念し、このような名称となりました。

まずは「あきた惟蔭の会」会長児玉幸子先生からは、「今年度も『あきた惟蔭の会』総会がオンラインで行われることが少し残念ではあるが、画面を通して多くの参加者の顔を見ることができたこ

とに喜びを感じる。」との挨拶がありました。そして引き続き総会では、秋田大学同窓会「旭水会」の事業報告や、「あきた惟蔭の会」役員選出、今後の事業計画の説明が行われました。

情報交換では、昨年度教職大学院を修了した伊藤充敏先生(仙北市立白岩小学校教頭)から、現在の職務についての報告がありました。日々の児童との触れ合いや、教科指導を行っている理科・社会を通じて児童から感じる驚きや感動について教えていただきました。さらに現役の大学院生に向けて、「みなさんのような新しい力が、学校現場に来てくれることを心待ちにしている。それまでは教職大学院でたくさん学んでほしい。」との激励がありました。現役の大学院生からは、「残りの半年間どのように教職大学院で過ごせばいいのか。」

「学校現場で必要となる力は何か。」という質問がありました。

同じく昨年度教職大学院を修了した遠藤史都先

生(加美町立賀美石小学校教諭)から、就任から半年経ち、現在初任者としての教師生活の実際、初任研での研修内容等の報告がありました。さらに、「教育現場では大学院での学びがとても役に立った。インターンシップで身に付けた実践力が、現在の働き方に活かされている。教職大学院での学びに、無駄なことは何一つない。」との話がありました。

さらに平成 29 年度に教職大学院を修了した佐々木勝利先生(南教育事務所指導主事)からは「東京 2020 オリンピック・パラリンピック」での陸上競技の審判員として参加した際の様子を多くの写真で紹介してもらいました。普段は見ること

ができないバックヤードの様子を知ることができました。佐々木先生はこれまでの自身の人生を振り返り、「教職大学院に入学したり、『オリンピック・パラリンピック』の運営に携わったりするとは思っていなかった。何が縁になるか分からないので今の縁を大切にしてほしい。」との話がありました。

今後も定期的に「あきた惟路の会」を開催し、互いの研究や職務について情報交換を行っていきます。この会を通じて、本教職大学院で得た人とのつながりが今後の大きな財産となっていくものと期待しています。

八峰町研修旅行 1 日目

学校マネジメントコース 現職院生 1 年次 正木 節

秋田大学教職大学院にとっての修学旅行ともいえるのが今回の研修旅行です。遠隔授業が続き、なかなか一堂に会して学ぶことができない状況が続いていましたが、無事にこの日を迎えられることにまずは感謝したい、そんな思いで八峰町に向け出発しました。

初めに訪れたのは五城目小学校です。昨年 12 月に完成したばかりという真新しい校舎に圧倒されます。小玉校長の案内の下、総工費 23 億円をかけて建設されたという自慢の校舎を見て回りました。映画館のような造りの階段教室、様々な活動ニーズに応えるオープンスペースの教室など、学習環境の豊かさに驚きました。至るところに大きな窓があり、五城目の美しい景色を見渡すことができる開放感抜群の校舎でした。小玉校長によると、この校舎は地域住民と熟議を重ね、願いや思いを聴きながらつくられたということでした。町の生涯学習エリアに隣接し、地域図書室「わーくる」と別棟でつながるなど、正に地域と共にある学校と

いう印象を受けました。

次に訪れたのが、八峰町文化交流センター「ファガス」です。八峰町教育委員会の川尻教育長からは、八峰町の自然資源について説明がありました。世界自然遺産である白神山地、ジオパーク、八森のハタハタなど、豊かな自然資源や地域人材を活用した教育活動がなされているということでした。印象的だったのが、八森小学校、峰浜小学校、八峰中学校の 3 校合同の学校運営協議会を設置していることです。町民みんなが協働し、町ぐるみで子どもたちを育てる学校運営協議会にしていくことで、将来の八峰町を支える人材育成や持続可能な地域作りの推進につなげていきたいとのことでした。

1 日目の訪問を通して気付いたことは、双方とも地域との深いつながりの中で、もてる教育資源をフルに活用しているということです。こうした取組は、これからの秋田の教育にとって必要不可欠な要素であると思いました。



五城目小学校での研修の様子



八峰町文化交流センター「ファガス」での研修の様子



八峰白神ジオパークでの様子



白瀑神社での記念写真

夏休みの過ごし方

カリキュラム授業開発コース
学部卒院生 2 年次 高橋海渡

夏休みは子どもの夢と希望が詰まった素敵な期間である。今年はコロナウイルスの影響で、例年のようにアクティブには活動できなかった子どもがたくさんいると思うが、インターンシップ先の学校では、「夏休み〇〇したの!」という喜びや充実感に満ちた子どもの報告をたくさん聞くことができた。「先生はね・・・。」と自分の話をしようとすると、特段報告するまでもない夏休みであったことに気付いた。学部生の時は「夏にしかできないことをしよう!」と思い出作りに励んでいたが、ここ数年夏休みは読書や研究など自己研鑽に励む期間になっていた気がする。幼いころ(6歳~22歳くらいまで)はあんなに待ち遠しかった夏休みが今では特別感のないものになってしまった。こう感じるということは、歳をとったということなのか、夏休みに慣れてしまったということなのか分からないが、少し寂しさを感じる。

社会人として働き始めると夏休みとは無縁の生活が始まると思うが、学校教員は夏休みと縁が切れない。自分の生活だけを考えればよい夏休みが、約30人の子どもの生活を考える夏休みに変わる。これからの時代、コロナウイルスが蔓延する前のようにアクティブに活動できるかどうかは分からない。だからこそ子どもたちには「夏休みはこれをするぞ!」という目標のようなものを立てさせたい。目標がないまま夏休みを迎えてしまうと、ただ自堕落な生活を送ってしまう可能性がある。目標があることで、大きなイベントがなくても充実感のある夏休みになると思う。教員も一緒になって夏休み期間中の目標を掲げ、夏休みが終わった後にそれを報告し合うのも面白そうだ。「教員」としての夏休みの迎え方をイメージしながら、残りの学生期間、勉学に励みたい。

第12回 あきたの教師力高度化フォーラム 基調講演

学校マネジメントコース
現職院生 1 年次 櫻庭泰則

文化庁の塩見みづ枝様より、GIGA スクール構想を踏まえた新たな学びの方向性とその具体についてのご講話、および今後の ICT 教育の活用の在り方についてご助言をいただきました。

今後の新しい学校教育の実現には、GIGA スクール構想を基盤として、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図ることと、校務の効率化や、教育データの利活用による学びの支援が必要だというご指摘がありました。そして、今後の学習用デジタル教科書の本格的導入を見据え、デジタル教材を効果的に活用した先進的な事例についてもご紹介いただきました。各校の実践からは、タブレットを活用した学習での試行錯誤の容易さ

や、他のデジタル教材と連携させて活用することで学びの幅を広げたり、内容を深めたりすることに役立つという ICT 教育のメリットがよく分かりました。

課題としてあげられたのは、個々の教員の ICT 指導力の向上でした。ICT を使うことが目的になれば、本末転倒になってしまうため、従来の指導法も大事にしながら、ICT を活用した方がより効果的だという部分から ICT 教育を始めていくことが大切だというご助言をいただきました。手段と目的をきちんと見極め、どこで、どう ICT を使えば最も効果的かを考えて授業構築をするという視点で研究を深めてほしいということでした。

た。今後は、ICT が苦手な教員であっても、ICT 教育の利点に納得して使ってもらえるような事例を増やして教員全体の指導力の向上を図ることと、各校での実技研修によって ICT 教育の裾野を広げていくことの大切さを理解することができました。ICT 教育推進にあたり、教師の不安の解消にどう対応していくかが大きな課題であり、その解決の

ためには負担をかけることなく ICT の良さを実感できる環境を効果的に準備し、どの教員にもやりがいと手応えを感じさせる実践の裏付けを積み重ねることが大切だという言葉がとても印象的でした。

中間発表会を経て

発達教育・特別支援教育コース
学部卒院生 1 年次 平塚達也

9 月 21 日に実践研究の中間発表会が zoom にて行われました。ストレートマスター 2 年次院生は実践研究の進展状況を、1 年次院生は実践研究の構想をそれぞれ発表しました。発表後には質疑応答の時間が設けられており、今まで自分では気付かなかったような視点から意見や質問をいただき、さらに研究内容を深めることができました。また、他の方々の発表を拝聴したことで、自分も負けていけないなと刺激を受けました。全体を通じて、多くの収穫があった非常に有意義な発表会になったと思います。

私自身の話をすると、今回の中間発表会と研究の構想や進展を振り返って 2 点気付いたことがありました。1 つ目は、思いばかりが先行して肝心の研究テーマが漠然としていたということです。自分の関心があるテーマについては、大学院前期の学びの中で「これについて絶対研究してみたい！」と思えるものを見つけることができました。しかし、テーマの中でより具体的にどういった内容を

取り扱うのか、どういった研究方法でアプローチしていくかなど研究の詳細の部分が不明瞭でした。2 つ目は、先行研究や実践をもっと調べるべきだったということです。発表後の質疑応答では、複数の先生方から先行研究や優れた実践を学び、テーマに関してより深い知識をもつ必要があると指摘されました。確かに、自身の研究テーマを決めきるのに時間がかかってしまい、先行研究や実践を十分に調べきれていませんでした。

私にとっては課題がたくさん見つかった中間発表会でしたが、今では後期にやるべきことがハッキリしたと前向きに捉えています。先行研究や実践については、今までの遅れを取り返すぐらい読み進めたいと思います。また、後期の実習でも研究テーマに関して新たな見方を得られるよう全力を尽くしたいと思います。私の研究のゴールはまだまだ先ですが、ここから少しずつ積み上げていき、いずれは学校現場で活用されることを目指していきたいです。

インターンシップⅡでの学び

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生 2 年次 佐藤大星

カリキュラム・授業開発コースの 2 年次は 5 月頃から秋田市内の公立学校で実習しています。今

年度もコロナウイルスの影響で日程の調整が難しかったのですが、実習校の協力もあり、何とか実

習することができます。そのような状況の中での実習でしたが、学びは昨年度よりも充実したものとなりました。

私は今までの実習で高学年しか見たことがなかったので、実習校から配慮していただき、1年生から6年生の各学年を見させていただけることになりました。各学年を見て回ると発達段階の違いはもちろん、昨年度の実習校の子どもの様子との違いなど、様々な違いが明らかになりました。そして、その実態に応じて教員の授業や生活指導の方法が変わっていました。子ども1人1人の違いが大きいからこそ、学校、学年、学級、子どもに応じた最適な学びを提供していくことが大切であると改めて感じました。今、学校現場では「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」をより一層図っていくことが求められています。その充実に向けた教師の「ワザ」を多くの人から吸収してい

きたいと思います。

また、2年次は実践研究についても実習を通して進めてきました。それぞれの院生が自分の専門とする教科について、実態を踏まえながらテーマをもち、研究しています。研究を実りのあるものにするために、先行研究の論文や参考になる文献を読んできました。しかし、理論ではうまくいっても、実践ではうまくいかないのが教育だと痛感しています。子どもの実態に合わせながら、研究を試行錯誤しながら進め、子どもたちのより良い学びになるように「理論と実践の往還」をしていきます。

さて、教職大学院で学ぶことができる期間も残りわずかとなりました。現場に出たときに「即戦力」としてチーム学校の一員になれるよう、残りの日々を精一杯、精進します。

大学院生活のこれまでとこれから

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生3年次 本田和也

大学院生活も残り半年です。大学院での3年間はとても充実した日々でした。通常であれば、大学院の生活は2年間です。しかし、私は他大学からの進学かつ小学校教諭の免許を新たに取得するために教職チャレンジ制度を利用しています。そのため3年間の生活となりました。

1年目は小学校教諭の免許を取得するため、学部生との講義の日々でした。1人だけ院生として講義を受講していたため、なかなか周りとは打ち解けるのが難しいだろうと感じていましたが、学部生たちはとても優しく受け入れてくれたため、とても充実した1年間でした。今でも学部の後輩たちには感謝をしています。2年目からは本格的に大学院生活の開始です。今までで得た教育の知識をさらに深化させる大学院の講義はどれも興味

深く、知見が広がる日々でした。特に附属小学校で行った教職実践インターンシップでは、自分の実践研究を進めるだけでなく、そこで勤務されている先生たちの子どもに対する想いや願いを知ることができ、自分が現場で働く理想のビジョンを明確に描くことができました。

そして3年目、現在は公立小学校での教職実践インターンシップを頑張っています。このインターンシップでは約1年間、週1日程度の実習を行います。この実習は想像以上に大変な日々となっています。理由はバラエティーに富んだ児童がたくさんいるからです。先生の話をしちゃんと聞く子、すぐに周りとおしゃべりをする子、おしゃべりが苦手な子、クラスに少しずつ馴染んできている転校生の子、すぐに泣いてしまう子、特別な支援が

必要な子、教室に入れなくなった子などなど。とにかく色々な児童がいました。当たり前ですが、1人1人の性格が違い、十人十色な存在であることを改めて感じることができました。そして、その

児童をまとめ、ともに歩き、導くのが教師の役目だと考えています。残りの半年間はその児童たちとともに、より良い未来へ進めるよう実習に励んでいきたいと思ひます。

今後の行事予定一覧

2021年 12月 7日(火) 実習の振り返り、今後の計画(10:45~12:00)

12月 11日(土)・12日(日) 日本教職大学院協会研究大会(愛媛 ZOOM)

12月 20日(月) 「実践研究報告書題目届」の提出締切

2022年 1月 25日(火) 事前発表会(全員)(9:30~16:00)

2月 6日(日) 「実践研究報告書」の提出締切(15:00まで)

2月 18日(金)・19日(土) 教師力高度化フォーラム

3月 14日(月) 審査に合格した「実践研究報告書」の提出締切

3月 22日(火) 卒業式